

【奈良国立博物館】 (計10件)

<彫刻> (1件)

1 名称	木造仏像背板 (もくぞうぶつぞうせいいた)	品 質	一枚板、吊り下げ用の鑿(鉄製)、一部白色下地及び朱色の彩色(後補)残る
作者等		員 数	1点
時 代	平安時代(9世紀)	寸法等	長102.5cm 幅13.5cm 厚1.5~2.5cm
作品概要	木彫仏の背板で、奈良・元興寺所蔵の国宝・薬師如来立像(当館寄託品)背面の背割孔に法量が一致し、かつ衣文が同像のそれに連続するため、同像の背割孔を塞いでいた背板と認められる。現状では、上下端を加工し壁掛け装飾に改変されているものの、元興寺薬師如来立像の背板として極めて貴重と言える。		
購入金額	5,000,000円		



<絵画> (1件)

2 名称	重要美術品 東大寺戒壇院屏絵図 (とうだいじかいだんいんとびらえず)	品 質	紙本墨画 掛幅装
作者等		員 数	2幅
時 代	鎌倉時代(12~13世紀)	寸法等	本紙:各縦121.2cm 横72.4cm(表具:各縦214.7cm 横88.1cm)
作品概要	各幅に梵天・帝釈天・四天王の計六尊の天部を三尊ずつ向かい合うように濃墨線で描かれる。奈良時代最盛期に描かれた絵画の姿を伝える希少な図像として以前から著名な品で、白描図像としては破格の大作である。当館寄託品である国宝・俱舎曼荼羅(奈良・東大寺蔵)中の諸尊と図像が一致するなど、南都の仏教絵画史を語る上で欠かせない存在であるとともに、各幅画面裏に捺された印から京都・高山寺旧蔵と判明することもその価値を高めている。		
購入金額	104,500,000円		



<書跡> (1件)

3 名称	三社託宣 (さんしゃたくせん)	品 質	紙本墨書 掛幅装
作者等		員 数	1幅
時 代	室町時代(15世紀)	寸法等	(本紙)縦130.7cm 横37.0cm (装丁)縦197.5cm 横48.9cm
作品概要	中央に天照大神(伊勢)の神号と託宣を、その右・左にそれぞれ八幡神(石清水)と春日神の神号と託宣を書き記した。三社託宣は中世末以降に数多く作られ、写本・版本を問わず遺品も多く残るが、室町時代以前の作となると限定され、貴重である。また、筆者として興福寺大乗院の経覚が想定され、奈良の地で製作された可能性が高い品である。		
購入金額	5,500,000円		



<工芸> (4件)

4 名称	金銅宝珠鈴 (こんどうほうじゅれい)	品 質	銅製 轆轤挽き 金鍍金
作者等		員 数	1口
時 代	鎌倉時代~南北朝時代(13~14世紀)	寸法等	口径6.8cm 現存高20.3cm 現存重866.43g
作品概要	装飾のない無地無文の鈴身部と縦長の太い柄杓が特徴的な宝珠鈴。静岡・尊永寺に伝わる五種鈴と同形式であるが、類例の極めて限られる大変希少性の高い品。火焔を欠失することは惜しまれるが、造形的にも優れており、密教法具の佳品として高く評価される。		
購入金額	38,500,000円		



5 名称	金銅宝珠鈴 (こんどうほうじゅれい)	品 質	銅製 轆轤挽き 金鍍金
作者等		員 数	1口
時 代	鎌倉時代(13世紀)	寸法等	口径6.9cm 現存高14.2cm 重402.51g
作品概要	鉢部に宝珠を表す宝珠鈴で、かつては四方火焔を伴っていたとみられるが、現在は欠失している。鬼目や蓮弁飾りの表現は平安時代風であるが、宝珠の形状や裾の開きから鎌倉時代に位置づけ得る。当館所蔵の独鈷鈴に口径が一致し、意匠や表現が同様のものがあり、本品はそれと一具をなすと判断される。		
購入金額	16,500,000円		



6 名称	金銅宝塔鈴 (こんどうほうとうれい)	品 質	銅製 轆轤挽き 金鍍金
作者等		員 数	1口
時 代	鎌倉時代(13~14世紀)	寸法等	口径7.4cm 高21.2cm 重603.68g
作品概要	肩が張って裾の開いた安定感のある鈴身に、鬼目部の太った把を合わせる、調和の良い中世前期の典型的な密教法具。鈴身、把、宝塔は別鑄で、組み合わされている。優れた造形性、質実な作風から鎌倉時代後期の作とみられる。当館所蔵の独鈷鈴、三鈷鈴、宝珠鈴に口径が概ね一致し、意匠や表現などが一致するものがあり、本品はそれらと共に一具をなすと判断される。		
購入金額	22,000,000円		



7 名称	金銅宝塔鈴 (こんどうほうとうれい)	品 質	銅製 轆轤挽き 金鍍金
作者等		員 数	1口
時 代	平安時代~鎌倉時代(12~13世紀)	寸法等	口径6.6cm 高11.4cm 重485.67g
作品概要	把の上端に丸い窪みが設けられ、内側に舍利を籠める宝塔鈴であった可能性が高いが、鉢部の宝塔は欠く。鈴身の丈が低く、肩を張らない形状や力強い蓮弁飾りの表現、大振りな鬼目は唐から将来された密教法具の特色を表すが、いずれも和様化が進んでいる。古式の制作技法である一鑄を採る一方で、鈴身の丈が低いという鎌倉時代に多い特徴から、平安~鎌倉時代初期の作と推測される。		
購入金額	11,000,000円		



<考古> (3件)

8 名称	灰釉短頸壺 (かいゆうたんけいこ)	品 質	陶製
作者等		員 数	1口
時 代	奈良時代(8世紀)	寸法等	口径16.5cm 器高29.8cm 最大径37.2cm 高台径18.7cm 重量6.7g
作品概要	大型の短頸壺で、口縁の周りから方の上部を巡るように灰釉がかかる。産地は胎土や釉調などから、愛知県猿投窯の製品とみられる。肉厚な口縁、大きく膨らませた体部など、豪快な作りが目目を惹く。また、現存する灰釉短頸壺のうち、本品は最大の法量を誇る。器壁外面の木炭の黒ずみ、口縁を灰で塗っていたことによる内面の汚れなどから、火葬骨蔵器であった可能性が高い。		
購入金額	66,000,000円		



9 名称	須恵器 短頸壺 (すえき たんけいこ)	品 質	陶製(須恵器)
作者等		員 数	1口
時 代	奈良時代(8世紀)	寸法等	壺:口径17.0cm 高29.7cm 最大径34.5cm 高台径20.0cm 蓋:口径18.7cm(復元) 高5.7cm(含復元) つまみ径2.8cm 同高2.3cm
作品概要	大型の有蓋短頸壺で、肩には部分的に自然釉がかかる。正倉院に伝わる薬壺と同種の品で、肩の張った器形より制作時期はおおよそ八世紀半ば頃と推測される。産地の同定には至らないが、精良な胎土、均整のとれた器形、良好な焼成など、大変質の良い伝統的な窯場の作とみてよい。なお、口縁と蓋が破損しているのは、本来火葬骨蔵器として使われ、土中埋納の間、あるいは発見時に破損したことによると考えられる。		
購入金額	10,000,000円		



10 名称	伯牙弹琴鏡 (はくがだんきんきょう)	品 質	青銅製鑄造
作者等		員 数	1面
時 代	中国・唐時代(8世紀)	寸法等	16.35cm
作品概要	八花形の鏡胎の背面に、竹林の中で琴を奏する人物や鳳凰、飛鶴や亀などを表した鏡。奈良県五條市出土との伝来を持つ。伯牙弹琴鏡は中国・唐で盛唐後半から中唐(八世紀半ば~後半)にかけて流行した鏡種で、日本にも流入した。国内でも同型鏡が複数確認される中、本品は鏡上がりの良さが目を惹く品で、蛍光X線分析から表裏面に鍍銀が施されている可能性も窺われる貴重な品である。		
購入金額	5,500,000円		

